和鉄の道 2015
【10】

大和の進出による新旧勢力交代による　国づくりの始まりをしめすのか ???

「伊弉諾神宮 国生み神話の島　淡路島」で　大量の埋納銅鐸出土　2015.5.20.

「出雲大社の国譲り神話の出雲」の大量の埋納銅鐸出土(加茂岩倉･荒神谷遺跡)とそっくり

1506doutaku00.htm　2015.6.1.　by Mutsu　Nakanishi

7 個もの銅鐸が集中して見つかった南淡路市松帆

国譲り神話の「出雲」・　国生み神話の「淡路」で起きた弥生時代の末　大量の銅鐸埋納

脚光を浴びる淡路の古代そして淡路の鉄　　鉄の新しい勢力への覇権移行をしめすのか?

神戸新聞　2015年(平成27年)5月20日　水曜日

工場の砂山から「数十年に一度の発見」

最古級含む銅鐸7点

神戸新聞 5月20日

南あわじ・松帆地区

内部の振り子3本も

5 月 20 日の朝　「南淡路から大量の埋納銅鐸出土」のニュースが関西の新聞紙上を大きく飾った。

すぐ頭に浮かんだのは同じ弥生後期　北淡路から出土し、まだその性格がよくわからぬ国内最大級の鍛冶工房村　五斗長垣内鍛冶工房遺跡のこと そして　同じ頃　出雲で起こった大量の埋納銅鐸・銅剣出土のこと。　埋納されていた銅鐸は　弥生時代前期末から中期初頭（BC2 世紀頃）の最古級の銅鐸で、まだ埋納された時期は定かでないにしても、淡路島での埋納銅鐸の状況はそっくり出雲と同じではないか・・・と。

淡路・出雲　あどちらの国も国生み・国譲り神話　そして、それぞれの国の象徴　伊弉諾神宮・出雲大社があり、新たな鉄器文化の勢力の新たな進出があり、日本の国づくりに大きな役割を果たしたと考えられる。しかし、淡路では国生み神話はあるが、それを示す遺跡・遺構がほとんどない。　　この大量銅鐸の埋納は弥生時代の成熟から古墳時代の始まりへと続く邪馬台国連合・大和初期王権への新しい国づくりの始まりを示す遺物の出土なのだろうか??

俄然　淡路の鉄・北淡路で出土した弥生時代 国内最大級の鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡の役割がクローズアップされてくる。

弥生時代の後期になっても　実用鉄器が日本全国に広がっていたわけではなく、 畿内の実用鉄器普及はまだこれからの時代。

北部九州で始まる実用鉄器普及の東進最前線は播磨・淡路・阿波と言われていた時代で、その最前線の淡路で出土した大量銅鐸の埋納と国内最大級の 鍛冶工房村。　そして、実用鉄器の覇権を連合の絆とした邪馬台国連合そして 初期大和王権へと日本の国づくりが始まる。

弥生の中・後期から末期　この淡路で何が起こっていたのだろうか???

信憑性は何とも言えないが、淡路の鉄に鉄のロマンが大きく広かるニュース。 考証できた話ではありませんが、次々頭に浮かんでくる日本の古代と鉄に和鉄の道・Iron road のロマンを重ねて、淡路に 勝手な鉄の夢を描いています

神戸新聞　第42138号　2015年(平成27年)5月20日　水曜日

最古級含む銅鐸7点

工場の砂山から「数十年に一度の発見」

内部の振り子3本も

南あわじ市の松帆地区で採取された砂の中から、弥生時代前期末～中期初頭(紀元前3～同2世紀)の銅鐸7個が見つかった。兵庫県と同市の両教育委員会が19日発表した。島根県の加茂岩倉銅鐸(39個、国宝)や神戸市灘区の桜ケ丘銅鐸(14個、国宝)などに次ぐ多数の出土。少なくとも1個は全国でも11例しかない最古形で、状態は良好だった。初期の銅鐸を解明する一級史料となる可能性が高く、研究者は「数十年に一度の大発見」と注目する。

(29面に関連記事)

南あわじ・松帆地区

見つかった銅鐸は、つり手(鈕)断面がひし形の「菱環鈕2式」と、本体部分の両脇に飾り板が付いた「外縁付鈕1式」の2種類。いずれも古式で、高さは約20～30センチ。うち3組6個は、中に小型が入れてある「入れ子」状態で、残り1個は単独で破損した状態で見つかった。

銅鐸内部につるされて音を鳴らす青銅の「舌」(振り子)3本も発見された。銅鐸と「舌」のセットの出土は全国で2例しかなく、極めて貴重。入れ子状態の3組のうち、1組は発見時に分離されており、今後、他の2組をコンピューター断層撮影(CT)スキャンで調べるが、全てに舌が残っている可能性がある。

兵庫県の銅鐸出土数は全国最多で、今回の発見で計68個(伝承記録分を含む)になる。うち21個が淡路島分。

今回発見の7個は、いずれも南あわじ市の西海岸沿いに位置する松帆地区に一括して埋められていたとみられ、「松帆銅鐸」と名付けられた。同地区の中の御堂では江戸時代に銅鐸8個の出土記録(1個現存、重要文化財)があり、古津路でも銅剣14本が出土。いずれも作られた年代が近く、何らかの関係が推測される。

同市埋蔵文化財調査事務所の定松佳重さん(46)は「こんなに大量に見つかるとは思わず、驚いた。青銅器文化を広い視野で見直す必要がある」と話す。

銅鐸は4月8日、同市内の玉砂利製造販売会社の従業員が砂を選別作業中に見つけた。連絡を受けた市教委が調査し、同23日までに残り5個を確認した。(田中真治)

銅鐸埋納地とみられる南あわじ市・松帆地区

発見された銅鐸

	型式	高さ	底幅	重さ	備考
1号	菱環鈕	26.6cm	15.5cm	1965g	舌がある
2号	外縁付鈕	22.4cm	12.8cm	1090g	舌がある。1号に入れ子
3号	外縁付鈕	31.5cm	17.5cm		
4号	外縁付鈕				3号に入れ子
5号	外縁付鈕	23.8cm			破損
6号	外縁付鈕	31.8cm	18.5cm		
7号	外縁付鈕				6号に入れ子

一括埋納されていたとみられる菱環鈕2式(左)など銅鐸7個と舌3本。外縁付鈕1式の2組(左から3、4個目)は入れ子状態＝南あわじ市湊市民交流センター(撮影・中西幸大)

「舌」伴う埋納 淡路の特徴か

難波洋三・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長の話　古い段階の銅鐸が7個、しかも「舌」を伴って見つかるのは非常に珍しい。音響具の機能を保ったまま埋めるのは淡路の特徴かもしれず、埋納の意味や時期を考える上で興味深い。畿内中心部ではなく、地元の勢力が埋納の主体であったとも考えられる。

島根県の加茂岩倉遺跡出土の銅鐸と似たものがあり、同じ鋳型から作られた可能性もある。状態がよく、美的にも優れており、銅鐸自体の研究も進むのではないか。

銅鐸(どうたく)　弥生時代の日本で作られた青銅器の一種。脱穀風景や稲を保管する高床式倉庫、シカ、イノシシなどの絵を描いたものもあり、豊作を祈る農耕祭祀(さいし)に使ったという説が有力。多くが集落から離れた山や谷に埋められているが、その理由はよく分かっていない。上部に「鈕(ちゅう)」と呼ばれるつり手が付き、当初は鳴らして使う「聞く銅鐸」だったが、次第に大型化して鳴らさなくなり「見る銅鐸」へ変化したと考えられている。時代が新しくなるほどつり手部分が薄くなることから、4時期に分けられている。

発見された銅鐸

	型式	高さ	底幅	重さ	備考
1号	菱環鈕	26.6cm	15.5cm	1965g	舌がある
2号	外縁付鈕	22.4cm	12.8cm	1090g	舌がある。1号に入れ子
3号	外縁付鈕	31.5cm	17.5cm		
4号	外縁付鈕				3号に入れ子
5号	外縁付鈕	23.8cm			破損
6号	外縁付鈕	31.8cm	18.5cm		
7号	外縁付鈕				6号に入れ子

銅鐸埋納地とみられる南あわじ市・松帆地区

南淡路　三原平野が広がる淡路島の中心地

松帆銅鐸が出土した南淡路市松帆

南淡路は三原平野が広がる淡路島の中心地で
淡路島でいち早く開け、在地の勢力の根拠地
そして　松帆はその瀬戸内海に面した淡路の玄関口である

大量の埋納銅鐸出土地　松帆

北淡路　平野の少ない丘陵地

国内最大級の鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡

五斗長垣内遺跡は北淡路　瀬戸内海を見渡せる丘陵地にあり、
同時期　この北淡路の丘陵地に数多くの高地性集落が出現し、
次の時代には五斗長垣内遺跡と同じく消えていったと聞く

五斗長垣内遺跡と同時期　北淡路に出現した弥生の遺跡群.

弥生時代は戦の時代と言われるが、時代の成熟と共に、集落からより大きな地域集団そして国へと抗争を繰り返しつつも、国づくりが進行してゆく。そして、益々巨大化する国づくりが進む弥生時代の後期から終末期、その力の源泉となる鉄・鉄素材の需要は急速に高まってゆく。

弥生時代の早くから、朝鮮半島や大陸から鉄器が日本に持ち込まれてきたが、日本で鉄は作れなかった。
当時　日本各地の国々の国づくりには実用鉄器は必須で、朝鮮半島の鉄を求めて、安定供給ルートづくりは不可欠。
　特に北部九州と違って、西日本の各地の国では北部九州に握られていた鉄の安定供給ルートの奪還確保は最重要課題で、邪馬台国連合　そしてその後の大和初期王権の諸国連合はこの鉄の安定供給ルートの覇権でまとまった集団と言われる。
邪馬台国はどこにあったか知らないが、盟主ヤマトにとって、朝鮮半島の鉄入手の玄関口として、瀬戸内海・日本海ルートの玄関口にあたる播磨・淡路は重要拠点であり、また早くから、北部九州または独自ルートで　朝鮮半島の鉄を入手していた出雲は畿内の大和連合にとっては押さえておかねばならぬ拠点であったろう。
弥生の戦さ・倭国大乱と呼ばれる戦乱を経て、西国の国々は初期大和王権へとまとまってゆく。
そんな過程では、在地の旧勢力と新ヤマト連合の新勢力との争いの中で、銅鐸など青銅器の埋納があったのだろう。
日本黎明の和鉄の道・Iron Road　集落からさらに大きな地域集団そして国への国づくり・弥生の戦と共に石器・青銅器の時代から鉄器の時代へ　この過程の象徴が銅鐸埋納なのだろう。

松帆銅鐸は起源前２世紀頃の銅鐸でその埋納時期も不確かな中で、一機にヤマト連合勢力の展開へ結びつけるのは乱暴ではあるが、瀬戸内海の玄関口で、実用鉄器普及のフロントにあたる淡路そして日本海ルートの拠点出雲では　その争いは厳しかったろう。そんな大和連合と在地の勢力との融和が、国生み・国譲り神話であり、また伊弉諾神宮・出雲大社を象徴にしてきたのかもしれない。 卑弥呼の邪馬台国　そして出雲・淡路の役割は??
淡路島の巨大な鍛冶工房村の存在や今回出土した松帆銅鐸など まだ淡路の地に眠っている遺跡・考古学遺物をふくめ、淡路が日本黎明の国づくり　そして邪馬台国や日本の製鉄の始まりなどをも解き明かしてくれるかもしれない。
あまり今まで　脚光を浴びていない淡路の考古学遺物・遺構がにわかにクローズアップされている。

◆　弥生の後期　畿内で実用鉄器社会への急変　村から地域集団　そして　国へ

畿内で鉄器需要が急増の変化を示す出土石器の急変（出土石器　砥石の急増）

にわかの淡路島クローズアップに多少こじつけ的ではあるが、弥生時代の終末期になると畿内も急速に実用鉄器時代へと突入してゆく。 弥生時代といえども、弥生時代後期の初め、大和を中心とした畿内では　まだ、実用鉄器が広く普及していたわけではない。

北部九州を中心として広がる実用鉄器文化東進のフロントは阿波–淡路島–播磨を結ぶラインで、畿内の実用鉄器の普及はまだこれからであった。 畿内での国づくりの始まりと共に急速に実用鉄器時代への変化が起こったと考えられる。

畿内での国づくりの展開は　鉄器需要の急増をもたらし、ヤマトを中心とした実用鉄器入手連合が展開され、西日本の実用鉄器素材供給のルートがこの時期に安定して確立されてゆく。

でも、北部九州による実用鉄器素材の供給ルート支配の中、畿内・ヤマトから朝鮮半島までのルートは長く遠い。

幾多の苦難や離合集散が　各々の地域・国々であったに違いない。

この時代に実用鉄器文化東進のフロントライン（阿波–淡路島–播磨）の淡路に国内最大級の鍛冶工房村が出現する。

これは畿内の実用鉄器素材の供給ルートが固まってきた例証といえるかもしれない。

同じく、淡路島の北部では鍛冶工房ばかりでなく、数多くの特産品の加工基地に見える高地性集落の急増を含む集落が急増し、 ヤマトの連合支配が安定化してゆく次の時代（弥生の終末期）には、それらはみな消えてゆく。 銅鐸埋納は淡路島でのそんな時代背景の中で起こったといえるだろう。

弥生時代後期（1世紀半ば～2世紀）には出土する石器のほとんどが砥石となり、石器製の農耕具の出土が激減する
近畿地方においても　この時代に実用鉄器の時代へ 入ったことがうかがえる。
（腐食等で鉄器の出土は少ないが、　鉄斧の柄が出土するなど実用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる）

弥生の後期　近畿地方での鉄器需要急増の変化を示出土石器の急変

［福宜田佳男氏作成資料を基に整理して本図作成］

国造りの時代　　鉄の覇権を求める中央ヤマト連合勢力　と　在地の旧勢力の接触　&抵抗　？

1.　出雲で　　出雲の在地勢力の荒神谷・加茂岩倉遺跡の銅剣・銅鐸埋納

大量の銅剣・銅矛・銅鐸が
埋められていた荒神谷遺跡

大量の銅鐸が一度に出土
加茂岩倉遺跡

荒神谷遺跡出土　大量の銅剣・銅鐸・銅矛

加茂岩倉遺跡出土　大量の銅鐸

◆　弥生時代　出雲の首長墓の変遷

弥生時代　出雲には独自の四隅突出墳が栄えた。 そしてその中心勢力は出雲の西部に始まり、東部にも中心勢力が起こった。
　中期には西部の勢力は衰退してゆく。 出雲の四隅突出墳は後期には消え、また東部の勢力は続くが、墳墓は方墳やヤマトと組んだ勢力の小さな前方後方墳並びに前方後円墳 が現れてくる。

なお、加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡の青銅器埋納時期はよくわかっていない。

◆　古墳時代　山陰の主要古墳の編年

古墳時代になっても、出雲では他地域のような前方円墳は作られず、主体は方墳と前方後方墳が 主体。
大和初期王権の象徴　大きな前方後円墳は作らせてもらえず、出雲が警戒され続けた ためだとも言われている。
大和王権の影響力の強さがよくうかがえる。
大阪近つ飛鳥博物館の白石太一郎館長は「出雲は初期ヤマト連合に加わらず、連合に加わったのは
東海の前方後方群グループや東国のグループが加わった時期ではないか」との説を提案している

国造りの時代　　鉄の覇権を求める中央ヤマト連合勢力　と　在地の旧勢力の接触　&抵抗　？

2.　播磨で　播磨風土記が記す　景行天皇の妻問い　－　印南別嬢の「抵抗」

神戸新聞に掲載された　播磨風土記　編纂 1300 年「神々の足跡を追う（1）」より

弥生時代なかば　　実用鉄器文化東進フロントで起こっていたせめぎ合い　大和の進出については淡路ばかりでなく、
播磨でも。神戸新聞　播磨国風土記　編纂 1300 年　「神々の足跡を追う（1）」によれば、
播磨風土記　加古郡の項に記された「大帯日子命（景行天皇）と印南別嬢（播磨稲日大郎姫）」の記事を政治的に読むと
播磨と大和との政治力学を示すエピソードがあり、播磨とが　スムーズに大和と連合したわけでないと見て取れるという。

播磨風土記　加古郡の項　　大帯日子命（景行天皇）と印南別嬢（播磨稲日大郎姫）

八咫剣・八咫勾・麻布都鏡で正装した大帯日子命が印南別嬢へ妻問いに明石郡までやってきたが、
それを聞いた印南別嬢は驚いて南毘都麻島に隠れてしまった。
賀古松原で別嬢を探していると、海に向かって吠えている犬を見つけた。
その犬が別嬢の犬であることを知り、天皇は海を渡った。

妻がなびた（隠れた）島であるので南毘都麻島（なびつまのしま）と呼ばれるようになった。
別嬢と会うことができた天皇は求婚し、夫婦となった。
年月が過ぎ、別嬢が亡くなって日岡に葬られることになった。
遺骸を船に乗せ印南川（加古川）を渡らせていると突風で遺骸が川の中に流されてしまった。
遺骸探したが見つからず、見つかった遺品の匣・褶を埋葬し墓としたため、
比礼墓（日岡陵）と呼ばれるようになった。
天皇は悲しみ、「この川の物は食べない」と言った。 これにより、この川の鮎は贄として出されなくなった。

景行天皇の妻問い―印南別嬢の〝抵抗〟

播磨とヤマトとの政治力学を示すエピソードとしては、ほかに、仁徳天皇をさかのぼること四代、記紀神話で十一代と紹介されている景行天皇の物語があります。こちらは「播磨国風土記」本文・賀古郡の項に収録されているものです。

「この丘（日岡）に比礼墓あり。褶墓と号くる所以は、昔、大帯日子命、印南別嬢を誂ひたまいし時に…」

という書き出しで、今の加古川市日岡にある「褶墓」の由来について語っています。大帯日子命とは、景行天皇のことです。印南別嬢は、播磨の豪族の娘さんでしょうか。その妻問いは、播磨におけるヤマトの支配を確立しようとする行為そのものでしょう。

景行天皇は、剣、勾玉、鏡という三種の神器を携えた〝正装〟で播磨に入ってきました。先述の明石の駅家まで来たという知らせを受けた別嬢は、驚いて南毘都麻島（加古川河口の三角州、現在の高砂市あたり）に逃げ渡りますが、見つかってしまいます。記紀神話では二人の間に日本武尊命が誕生し、日本統一に大きな力を発揮しますが、時を経て、別嬢は亡くなります。

「その尸を挙げて印南川（加古川）を渡る時に、大飄、川下より来て、その尸を川中に纏き入れき。求むれども得ず。但匣（化粧箱）と褶（スカーフ）とを得たり。すなはち、この二物を以てその墓に葬りき。故れ、褶墓と号く…」

亡くなった印南別嬢の遺骸は、舟で加古川をさかのぼり、日岡に埋葬されることになります。ところが、移送途中、大きな旋風が川下より吹きつけ、遺骸もろとも舟を沈めてしまいます。必死で捜索を試みたのですが、見つからず、匣と褶だけが残されていました。やむなく、この匣と褶とを葬ったので、褶墓と呼ぶのだ、と記されています。

古代政治の舞台ほうふつ

この、景行天皇と印南別嬢のドラマを、先の速鳥丸の話と重ね合わせ、政治的に読んでみるとどうなるのでしょうか。

時代的にきちんと整理されたものではありませんが、おぼろげながら、大和における政権確立プロセスを髣髴させてくれます。今で言う古墳時代の大王とされる景行天皇は、全国統一を視野に、播磨の併

古代政治の舞台ほうふつ

この、景行天皇と印南別嬢のドラマを、先の速鳥丸の話と重ね合わせ、政治的に読んでみるとどうなるのでしょうか。

時代的にきちんと整理されたものではありませんが、おぼろげながら、大和における政権確立プロセスを髣髴させてくれます。今で言う古墳時代の大王とされる景行天皇は、全国統一を視野に、播磨の併

合を試みます。これに対し、播磨では、求婚を拒むという形で一定の抵抗姿勢を見せていますが、四代を経た仁徳期になると、播磨は完全にヤマトの軍門に降っているのです。この変化から、「ハリマ対ヤマト」という政治的対立がさまざまな葛藤を経てやがて終息し、同時に、大和政権が各地の豪族を降して全国支配を確立したことをも暗示しています。

景行天皇と印南別嬢の妻問いの舞台となった加古川河口付近

神戸新聞　播磨国風土記　編纂1300年「神々の足跡を追う（1）」より切り抜き　2015.5.30.

国譲りの出雲・出雲大社　国生みの淡路・伊弉諾神宮　この二つの神話の国で　多数の銅鐸埋納の出土。 弥生時代なかば　実用鉄器の時代の幕開けが　村から地域集団そして国へと日本各地で国づくりを急伸させて行く。

そんな実用鉄器文化東進フロントで起こっていた新勢力中央ヤマトの新勢力と在地の旧勢力の抵抗せめぎ合い

卑弥呼の邪馬台国　初期大和王権と北部九州の鉄の覇権争い

鉄の覇権獲得でまとまる中央ヤマト連合が次々と西日本の国々を糾合しつつ、

朝鮮半島からの実用鉄素材入手ルートを確立。　さらに東国へも。

そんな過程が急進する中での出雲・淡路の役割はどうなのだろうか・・

今までの定説の見直しがあるかもしれない。

邪馬台国の謎　日本の製鉄伝来史も書き換えられるかもしれない。

ブラックボックスだった淡路がにわかにクローズアップされ、

古代の淡路に次々と思いが浮かんでくる。

まったく　考証できた話ではありませんが、時代時代の断片を頭に浮かぶままに並べました。

日本の国づくりが進む　和鉄の道・Iron road　で起こった銅鐸埋納に 鉄勝手なのロマン　夢をのせています。

2015.5.30.　　by Mutsu Nakanishi

【参考　和鉄の道　Iron Road 】

1. 弥生時代後半　国内最大級の鍛冶の村　国生み神話の淡路島　「垣内遺跡(鍛冶工房跡)」現地説明会 Walk
倭国から初期大和王権誕生へ　日本誕生の謎を解き明かすかも・・・　2009.1.25.
http://www.infokkkna.com/ironroad/2009htm/iron5/0903kaito00.htm

2. 一筋縄ではいかぬ古墳時代の幕開け　激動の時代 淡路島がその鍵を握るのか ????　2009.4.5.
淡路島で発掘された卑弥呼の時代の日本最大級の鍛冶工房村の位置付けに思いをめぐらす
http://www.infokkkna.com/ironroad/2009htm/iron5/repoaw00.htm

3. 弥生の高地性集落【4】　弥生の高地性集落に「弥 生の戦」・「日本人のルーツ」を探して 2006.10.5.
http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/6iron14.pdf

【関連　参考地方創生の成功例　　淡路島　五斗長垣内遺跡　】

神戸新聞 2015.5.6.朝刊社説より 転載

淡路島　五斗長垣内遺跡 たたら製鉄関連遺跡を生かした地方創生の成功例

≪*「伊弉諾神宮 国生み神話の島」　淡路島で　大量の埋納銅鐸出土　」*≫の記事にも記した

弥生時代 国内最大級の鍛冶工房村「淡路島　五斗長垣内遺跡」が「遺跡を中心とした地方創生の成功例」として、新聞に紹介されているのを見つけました。

製鉄遺跡や製鉄関連遺跡はその時代時代の産業廃棄の跡で、発掘の当初は騒がれ、色々イベントや整備が行われても、そのブームが去ると街の片隅でひっそりさらに朽ちて産業廃棄物に・・・・・。そして　街のほとんどが知らないと・・・・。

そんな中で、地域の人が「地域の宝」といい、継続的な地域活性化展開が進んでいるとの記事。

私の住む　神戸の近くで、いつも気になる「五斗長垣内遺跡」の今を新聞記事の転載でご紹介。

遺跡活用の地方創生の成功例　2015.5.6.

地域の宝 古代遺跡「五斗長垣内遺跡」と生きる地域の挑戦

弥生時代の国内最大級の鍛冶工房村

淡路島 五斗長垣内遺跡の今

神戸新聞　2015年5月6日朝刊社説　より

古代遺跡の活用による地方創生の原動力は地元住民が「地域の宝」と呼ぶ「何とかしなければ」の地元住民の危機感と熱意から生まれた創意工夫だった

訪れた人たちの感動と喜びは「思いもかけぬ遺跡との出会いと人との触れ合い」から。それが相互の訪問増加・地域活性の連鎖を生んだ

社説

淡路・五斗長から

古代遺跡と生きる地域の挑戦

地方創生の原動力は住民の「何とかしなければ」の危機感　と　熱意から生まれた創意工夫 だった

古代遺跡と生きる地域の挑戦

2015.5.6.　神戸新聞朝刊　社説より転記

災いを転じて福となす。その言葉を地で行く地域が淡路島にある。

淡路市・五斗長地区。約50世帯、170人。山の斜面から西に瀬戸内海を望む集落は、11年前の台風23号で棚田が土砂に埋まり、ため池が決壊するなどの大被害を受けた。

ただでさえ農地の維持が困難な山間部を災害が襲う。意気消沈する住民に元気を与えたのは、土砂の下から出土した古代遺跡だった。

遺跡の活用施設を自分たちで整備し、見学者を地元食材の手料理でもてなす。災害復旧でほ場整備を行った水田では集団営農を展開する。

逆境から再生した五斗長は今、新しい発想でむらおこしに挑む。担い手は住民たちだ。

政府は「地方創生」を提唱する。行政の支援も大切だが、肝心なのは古里を愛する人々の思いだろう。

◇

淡路・五斗長から

「以前は全てが悪い方に向かっていた」。集落のリーダーの一人、高田一民さん(56)はそう話す。

斜面に棚田が連なる五斗長の地形は、もともと水の確保が難しい。そのため、ため池を利用した稲作が営まれてきた。タマネギ栽培が根付いたのも、水に乏しい自然条件に適合した作物だからである。

棚田の水の管理や草取りは負担が重く、高齢化とともに耕作放棄が目立ち始めた。特産タマネギの共同出荷組合も担い手不足で解散した。若者は地元を離れる。台風23号に被災したころは小学生がいなくなり、就学前の幼児も1人になっていた。

「あのままでは地域は衰退し、農地も草が生い茂る状態になっていただろう」と高田さんは振り返る。

台風被害をばねに

台風による被害は壊滅的だった。集中豪雨でため池5カ所が決壊し、水田の大半が土砂で埋まった。

しかしそこで住民は立ち上がる。「これでは本当にだめになる」。災害時、旧北淡町職員だった高田さんを先頭に、壮年世代が災害復旧事業によるほ場整備を提案した。集落運営の主導権が交代期を迎えており、上の世代も理解を示した。

予想もしない発見があったのは土木工事が始まった直後だ。水田の下から国内最大級の鉄器生産集落跡が現れた。竪穴建物跡23棟。うち12棟が古代の鍛冶工房で、時代は弥生後期とみられる。「五斗長垣内遺跡」の名で国の史跡に指定された。

島内外から専門家や歴史ファンが訪れた。もてなす住民から「遺跡を公園にして地域のシンボルにできないか」との声が出た。

用地は市が買い取って整備し、住民は「まちづくり協議会」をつくり、拠点施設を建設した。土、日曜に施設のカフェでふるまう特産タマネギなどの料理も評判になり、2013年5月のオープンから1年半で入場者は1万人を突破した。

地方創生の原動力は住民の「何とかしなければ」の危機感　と　熱意から生まれた創意工夫 だった

地元食材の料理も人気を呼ぶ

今年の連休には淡路花博に合わせて「たまねぎまつり」を開催。7月は毎年、「ひまわりまつり」に多くの観光客が詰めかける。

地元では出土した遺跡を「宝物」と呼ぶ。農地の一部を削って地域の財産とし、施設で使うテーブルやいすを自分たちで製作した。「手作り」の活動が心を一つにした。

住民の熱意と工夫

農業でも新たな道を模索する。兼業農家が多いことも考え、戸別の耕作に終止符を打った。全農家で営農会社を設立し、耕作は会社が担う。農作業に参加した住民には日当を支払う。耕作放棄地をなくし、タマネギの共同出荷を再開した。

昨年から収穫したタマネギの一部を貯蔵し、最適の時期に出荷し始めた。そうした工夫で黒字経営を維持する。歯車は前に回り始めた。

地方創生の長期ビジョンは「地域資源の活用」や「外部との連携による活性化」などを目指す方向として掲げる。その成功例といえそうだが、忘れてはならないのは、地域が存続の危機に直面していたことだ。

「後戻りできない状況にまで追い込まれ、それが意識を変える転換点になった」と高田さんは話す。県や市の補助事業も活用したが、原動力は「何とかしなければ」という危機感と地元の創意工夫だった。

今は30代前後の住民も定着し、次の世代の誕生を地元は期待する。災害から立ち直った五斗長の例は他の地域に元気を与えるはずだ。

その実践から地域の未来を考えたい。答えは足元にある。

訪れた人たちの感動と喜びは「思いもかけぬ遺跡との出会いと人との触れ合い」から。
それが相互の訪問増加・地域活性の連鎖を生んだ